

文学作品を活用したインタープリテーションの効果について

The effect of the interpretation that utilize literary works

唐箕 環*

TAMAKI, Toumi

本報告は、観光活動において場所を経験するためのツーリストの一手段として、インタープリテーションに注目した。さらに、その方法の一つとして、文学作品を始めとする物語に重点を置いた内容のインタープリテーションを行うことによって、その効果を明らかにすることを試みた。

キーワード：インタープリテーション、場の経験、文学

1. 研究の背景と目的

近年インタープリテーションを活用した観光活動が、自然を対象としたものだけでなく、文化や歴史を対象にしたものでも行われており、その有効性が注目されている。マキアーネル(2012)は「観光客がガイドとなり、例えば、ある人がガイドとなって他の町に住む親戚を近隣の視覚対象に案内する場合、当のガイドがその時点で提示する徴表は、その視覚対象を興味深いものにし、そして案内された人は印象深い経験をする」と述べている。このことは、個人で場所を経験するよりも、観光客に深い経験を与える可能性があるのはガイド、すなわちインタープリテーションにあるという点を示唆していると言えよう。

チルデンはインタープリテーションを「単に事実や情報を伝えると言うよりは直接体験や教材を活用し、事物や事象の背後にある意味や相互の関係を解き明かすことを目的としている教育活動である」¹と定義しており、ツーリストがインタープリテーションによって深い経験をし、場所の価値について認識することで場所の保護活動につながっていくことを期待できるとしている。このため、インタープリテーションを効果的に行うための様々な方法が用いられており、ストーリーテリングを手法とした昔話などの地域に伝わる物語の活用も有効であると推測される²。物語は民話から文学まで多様な形態があり、ブーアスティンは文学について「伝統的な小説という形式がわれわれの経験をいまでも拡大することができる」³と述べ、経験に与える文学の可能性を示唆している。またトウアンも「文学が照らし出すことができるのは(中略)人にあまり注目されない目立たない場なのである。文学は我々が気づかずに過ごしてしまうかもしれない経験の領域に注目する」⁴と指摘している。以上の点から、観光地化されていない場所の特徴を認識する方法として、文学作品の活用は有効であると考えられよう。文学作品の解釈は個人によって差異が存在することから受容理論が認められているが、イーグルトンはそれを見せかけの開放性と述べ「個人としての私たちの経験はその値に至るまで社会的なものだ」⁵と指摘し、個人の差異に対する反証を試みている。すなわち文学作品の解釈は社会的なコード共有⁶が前提としてあり、それは社会の共通認識として現れ、社会に影響を与える可能性もある。そこで本報告では、地域

* 北海商科大学観光学研究科博士課程2年

情報が記載されている文学作品を活用したインタープリテーションに着目した。

インタープリテーションに関する既往の研究は、市民ボランティア活動にインタープリテーションを導入してその有効性を調査した齋藤⁷の研究があげられるが、自然ガイドの動向調査に留まっている。松島⁸は海浜利用者の現状の認識と態度の変化について啓発ポスターを用い、短時間でインタープリテーションを行って調査をしているが、チルデンの原則⁹に則ったインタープリテーションを行っているとは言えない。文学・アニメ作品が舞台になった観光地研究はコンテンツ・ツーリズムとして動向調査などが散見されるが、文学作品の内容をインタープリテーションに活用し、ツーリストイメージを調査した研究は見られない。

本報告は、文学作品を活用した観光地のインタープリテーションを行うことで観光地に対する観光客のイメージの変化について調査し、インタープリテーションの題材として、文学作品の有効性を明らかにすることを試みた。

2. 研究の方法と流れ

図1に本報告の流れを示す。本報告は、対象地に関する文学作品を活用したインタープリテーションを被験者に実施し、その影響について四件法による調査を行い、対象地のツアー前とツアー後のイメージの変化を把握した。また文学の性質である虚構の内容に重点を置き、観光地の物語性を形成する虚構とインタープリテーションの関係性を明らかにすることを試みた。調査は2015年2月開催のバス旅行を活用した。表1に示したように、まず参加者にツアー出発の1週間前に調査票を郵送し、65個の対象地のイメージを表す言葉に対してSD法によるイメージ調査(図2)を行った。ツアー中は筆者が文学作品に関する内容の原稿(図3)を作成し、対象地に到着するまでバス車中にてインタープリテーションを行った。次に旅行終盤で、事前調査と同じ内容の65個の対象地のイメージを表す言葉に対して、SD法によるイメージ調査を行った(図2)。

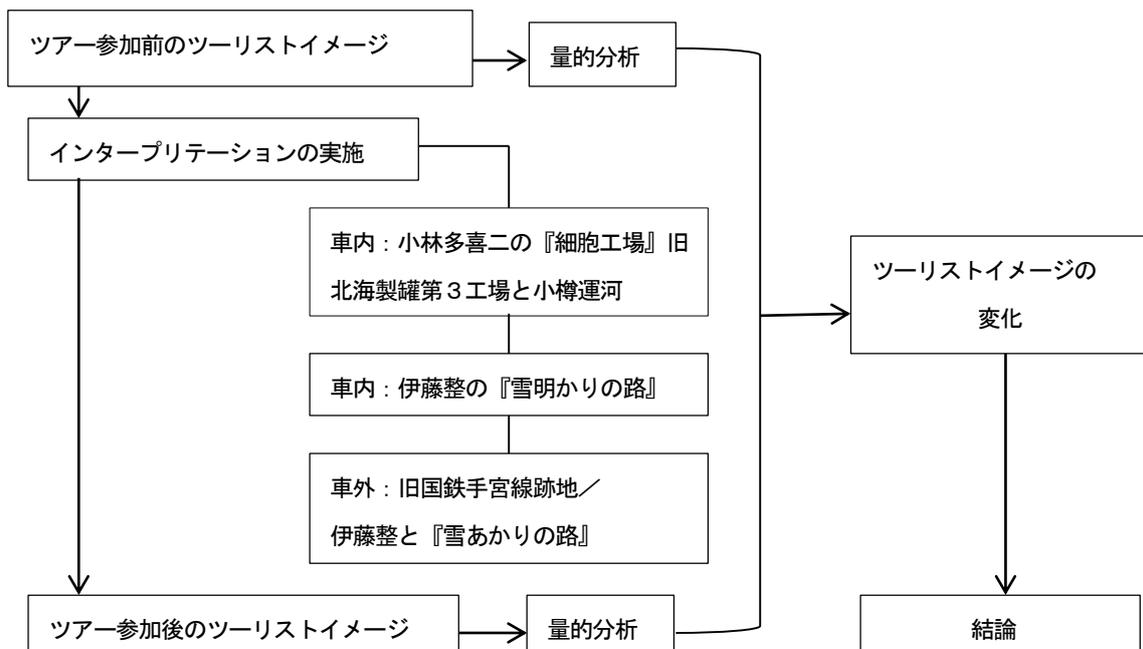


図1. 研究の流れ

そしてその結果を因子分析によって分析し、考察を試みた。

SD法によるイメージ調査については、ツアー前とツアー後の調査事例が揃って有効となるため、38調査事例のうち、無記入の多い5調査事例を除外し、33調査事例の回答を有効とした。属性は表2の通りである。

2. 小樽のイメージ (雰囲気など) についてお聞きます。

下記の言葉に対して、「とても思う」ものには◎を、「やや思う」ものには○を、「あまり思わない」ものには△を、「まったく思わない」ものには×を、空欄にお書きください。

美しい	きらびやか	華やか	あざやか	つつましい
優しい	大人しい	静か	おだやか	つまらない
古い	懐かしい	さびしい	悲しい	汚い
新しい	新鮮な	改革的な	整っている	清潔な
荒々しい	情緒がない	うるさい	猛々しい	活気がある
楽しい	にぎやか	おもしろい	うるさい	明るい
珍しい	独特な	斬新な	奇妙な	変わっている
親しみやすい	話しやすい	わかりやすい	おおらか	豪快
迷いやすい	混沌としている	ぼんやり	こわい	異次元のよう
苦しい	つらい	重々しい	痛い	悩ましい
歴史的	重み	つながり	積み重ね	あたたかい
幻想的	おとぎ話のよう	あやしげ	あこがれ	不思議さ
芸術的	都会的	風土的	繊細	難しい

図2. インタープリテーション調査票

表1. 調査票配布・回収内容

旅行実施日	2015年 2月15日	
インタープリテーション事前調査票	配布日	2015年2月5日
	配布方法	郵送
	回収日	2015年2月15日
	回収方法	当日の受付時
インタープリテーション事後調査票	配布日	2015年2月15日
	配布方法	バス車内・手渡し
	回収日	2015年2月15日ツアー終盤
	回収方法	最終地点到着前

表2. 実験参加者の属性

属性項目 n=33				
年齢	30代以下	3%	居住地 札幌市 90%	
	40代	6%		石狩市 3%
	50代	6%		その他 6%
	60代	58%		訪問回数 2回目 3%
	70代以上	27%		3回目 97%
性別	男性	21%		
	女性	79%		
数値は人数				

場所	インタープリテーション内容
余市→小樽 ※車窓から北海製罐	<p>【労働争議】マッサンが余市に来てウイスキー工場を造ったのが1934年、昭和9年のことです。ドラマでは、小樽軟石の壁に赤い屋根の工場、そして薄い緑色の、竹鶴夫婦が暮らしたおしゃれなリタの家など、しゃれたイメージがありますが、そのわずか5年ほど前に、『蟹工船』で知られている小樽出身の作家、小林多喜二が資本家による労働者の搾取を訴えた「労働争議・労働運動」について書いた作品を発表しています。「おい、地獄さ、行くんだで！」で始まる『蟹工船』、こちらは数年前、非正規雇用者の現状や若年層のフリーター問題、ネット難民などの問題が注目された時に中村獅童さん主演の映画にもなりました。戦前に、オホーツク海のカムチャツカ半島沖海域で行われた北洋漁業で使用される、漁獲物の加工設備を備えた大型船での話が舞台です。積んである小型船でたらば蟹を獲り、すぐに大船で蟹を缶詰めに加工します。その大型船、母船の一つである「博光丸」(ひろみつまる)が本作の舞台となっています。蟹工船は「船」、カニ缶詰の製造工場であって、船を航行する「航船」ではない。だから航海法は適用されず、危険な古くて壊れそうな船が改造して使われました。また工場でもないのに、労働の法律も適用されませんでした。そのため蟹工船は法律の届かない場所、治外法権として、海上の閉鎖空間である船内では、東北の農村地域などの貧しい人などの出稼ぎ労働者に対する資本側の非人道的なひどい働かせ方がまかり通っていました。また北洋漁業振興の国策から、政府も資本側と結託して事態を黙認する姿勢であったのです。『工場細胞』は、『蟹工船』でも出てきた、カニの缶詰などを作っている工場を舞台にした作品です。1930年、昭和5年に書かれました。(マッサンが大坂、鴨居商店でスモーキーフレーバーのウイスキーが作ることもままならず、悶々としていたであろう時期ですね。)『工場細胞』のテーマもやはり、労働運動の弱かった時代における、近代工場で働く人たちの労働運動を描いた闘争の記録となっております。作品ではアルファベットで伏せてH・S製罐工場、と書かれていますが、こちらは現存する「北海製罐」のことでございます。今も北運河の方に巨大な建物が倉庫として使われております。1933年、(マッサンが余市にウイスキー工場を作る前の年ですね)、特高警察につかまり、拷問され、獄中死してしまいました。30歳の若さで世を去りました。こんな暗いお話、ですがご本人はとても明るい性格で、またお母さんをととても大切にしていたそうです。</p>
小樽運河→小樽文学館	<p>【伊藤整】現実的な作品が多かった小林多喜二ですが、一方、もうひとりの小樽を代表する小樽出身の作家、伊藤整はファンタジーの世界感を作品に表しています。20歳で東京の大学に出るまでは塩谷の自宅で多感な少年時代をおくっていました。今回訪れる小樽のイベント雪あかりの路は、伊藤整の詩『雪明りの路』の世界観を表現しているようです。(朗読) 雪明りの路から「雪夜」～ああ、雪のあらしだ。家々はその中に盲目になり、身を伏せて埋もれている。この恐ろしい夜でもそっと窓の雪を叩いて覗いてごらん。あの吹雪が木々に唸って狂って一しきり去った後を気づかれないように覗いてごらん。雪あかりだよ。案外に明るくてもう道なんか無くなっているが じずかな青い雪あかりだよ。(配布)</p>

図3. 文学作品を中心にしたインタープリテーションの原稿

3. 旅行企画の目的

(1) 実施概要

旅行企画の目的は、筆者が地域の記述、および虚構的な体験を重ね合わせた文学作品を題材としたインタープリテーションを中心に行うことで、観光地に対するツーリストイメージの変化を明らかにすることを試みるものである。今回の対象地は数々の文学作品で取り上げられて関連イベントが行われている小樽市と、ドラマで取り上げられた余市町を巡る旅行企画を活用した。旅行形態は参加者をバスで引率する団体ツアーとなり、主なインタープリテーションは車中で行った。現地施設でも案内人を手配し、車中のインタープリテーションは事前知識および補足として行った。

(2) 対象施設の概要

本報告に関する対象地は小樽にある①、②、③の3ヶ所である。それ以外の対象地でインタープリテーションを行った箇所は④、⑤の2ヶ所である。

- ①「小林多喜二と運河倉庫群」
- ②「伊藤整とイベント・小樽雪あかりの路」
- ③小樽文学館
- ④ニッカウキスキー余市醸造所
- ⑤余市ワイナリー

4. 各場所におけるインタープリテーションの目的と概要

各場所で行ったインタープリテーションの内容を示す。

(1) 小林多喜二の『細胞工場』－旧北海製罐第3倉庫

①インタープリテーションの目的

小樽運河の東側埋立地に並んでいる施設群は大正10年代から昭和10(1935)年にかけて建てられたものであるが、通常観光客は訪れない場所である。その内の一つ、旧北海製罐の第3倉庫は、小樽出身のプロレタリア作家である小林多喜二が1930年に著した『工場細胞』の舞台で、小樽市指定歴史的建造物第76号に指定されている。当施設でのインタープリテーションの目的を次の2点とした。1点目は、「小樽経済を支えた労働者たち」で、小樽経済の発展は北洋漁業の乗組員を始めとする多くの労働者によって支えられてきたという点を理解してもらうことである。2点目は、小樽の「海岸段丘」という海から山に向かって徐々に坂になっていく独特な地形についてであり、住民にとって生活しやすい地形とは言えないが、反面として坂のある街の魅力について理解してもらうことである。

②インタープリテーションの概要

まず、バスの車内で小林多喜二のプロフィールについて説明した。インタープリテーションは、運河沿いの道である北浜線を余市方面に向かって走行するバスの中から見学する形態を実施した(図4)。再び余市町からの帰途、往路とは反対側の部分について小樽港循環線を走行するバスの中から見学し、全体像を把握できるように試みた(図4)。

1点目の「小樽経済を支えた労働者たち」についてのインタープリテーションはクイズ形式を採用し、受身的な旅行形態をより参加型度の強いものになるように工夫をした。その内容の1つ

目は、「小樽運河の起源」に関連した問題を採用した。2つ目は、「運河の役割」についてである。特に運河の役割に関しては、停泊した船からの積荷は台船を使って運河経由で倉庫に運ばれていた話をし、その際に、イメージをより具体的にするために小林多喜二の『工場細胞』の内容と関連付けた。また、小林多喜二の『蟹工船』について知っているか質問したところ、知っていると答えた参加者が半数程度おり、その内、読書をしたことがある参加者は3人であり、同じ場所が小説の舞台となっても作品の認知度にばらつきがある点が示された。インタープリテーションでは粗筋を説明し、そして『蟹工船』の作品に出てくる缶詰が北海製罐で作られたものであることを解説し、車窓見学のイメージをより豊かにすることを心がけた。

2点目の「海岸段丘」については坂の見学は行わず、広報おたるの文章¹⁰を採用し、車内でインタープリテーションを行った。広報おたるに掲載されている原文を朗読し、参加者に坂の街での生活をイメージしてもらうことを試みた。



図4. 旧北海製罐第3倉庫は工場マークで示した。

往路と復路で車内からインタープリテーションを行った旧北海製罐第3倉庫（筆者作成）

(2) 伊藤整と雪あかりの路・旧国鉄手宮会場

①インタープリテーションの目的

2004年から開催されている市民参加型の背景もある冬の観光行事、小樽雪あかりの路は小樽出身の作家、伊藤整が著した『雪明かりの路』から命名されている。小樽市内数カ所で開催されており、その運営は市民を始めとする延べ2,000人のボランティアが多様な役割を担っている（図5）。伊藤整の詩で表現された作品のテーマを、雪国の生活の厳しさの反面、雪による自然現象の美しさにも目を向けることと考え、北海道の自然の豊かさについて体験してもらうことを目的とした。

②インタープリテーションの概要

まず、バスの車内で伊藤整のプロフィールについて説明をした。そしてイベントが伊藤整の作品『雪明かりの路—雪夜』が由来となっている点、また、本作品の舞台は、伊藤整の生家があった塩谷地区であることを説明した。この作品の記述をきっかけにして、伊藤整の作品の世界が現



図5. 雪あかりの路・旧国鉄手宮会場にて市民ボランティアから説明を受ける参加者

実のイベントに反映されたことを説明した。作品についてはほとんどの参加者が認知していなかった。作品の解釈をツアーリスト個人に委ねる為に、詩集『雪明かりの路ー雪夜』の印刷物を全員に配布した上で、筆者が朗読した。

(3) 小樽文学館

① インタープリテーションの目的

小樽文学館は、旧郵政省小樽地方貯金局を活用した美術館併設で 1978 年に開館した (図6)。小樽文学館に対するインタープリテーションの目的は、多様な資料によって対象地をより詳しく理解することであり、次の3つを目的とした。

1点目は、直筆原稿や小林多喜二のデスマスクなどの展示資料を見学し、人物像をより具体的にイメージしてもらうことである。

2点目は、小樽の経済的繁栄を背景にし、文学や美術などの文化面においても青年たちが全国から集まり、特に小林多喜二と伊藤整は小樽を代表する出身作家として存在している点、そして両者を中心とした資料によって、小樽の歴史の一端が垣間見られる施設であるという点を理解してもらうことである。

3点目は、小林多喜二は銀行員として金融機関に勤めていたことがある資本家側の人間でありながらも労働運動に傾倒していき、資本家と労働者という対立の存在がこの作品によって明らかにされている点を理解してもらうことである。

② インタープリテーションの概要

目的で前述したように、小樽文学館は小樽の歴史を考える上で有意義な施設であることを説明したのち、前述同様、バスの車内で小樽が舞台になった文学に興味があるかどうかについて質問し、挙手によって把握した。それを参考にして学芸員の詳しい説明の前に個人的な理解度の格差を是正するために、小林多喜二および伊藤整のプロフィールを説明し、二人の生い立ちなどの環境と思想の違いについて概要を説明した。その後、より詳しい説明を学芸員から受けた (図6)。



図6. 小樽文学館で見学する参加者

5. 調査結果による旅行体験の変化

インタープリテーションの事前調査票と事後調査票で、65個の言葉を提示し、参加者が抱えている対象地についてSD法によるイメージ調査を行い、その結果を因子分析した。

(1) インタープリテーション前の小樽のイメージ

表3に示したように、第1因子では「改革的な」「きらびやか」「華やか」「難しい」「あやしげ」「悩ましい」「つらい」「重々しい」「猛々しい」「汚い」「情緒がない」「騒々しい」「奇妙な」「こわい」「痛い」「異次元のよう」「おとぎ話のよう」が高い負荷値を示している。従って第一因子は「不確実な革新性」とした。

第2因子は、「珍しい」と「独特な」が高い負荷値を示しており、「地域特性」と推測される。また第3因子は負荷値が低いため考慮しなかった。よってツアー前のイメージは「不確実な革新性」と「地域特性」によってイメージされていると言えよう。

表3. インタープリテーション前の小樽のイメージ

イメージを表す言葉	Factor1	Factor2	Factor3	イメージを表す言葉	Factor1	Factor2	Factor3
きらびやか	.824	-.140	.204	親しみやすい	.069	.574	.517
華やか	.801	.144	.034	話しやすい	.398	.611	.057
あざやか	.723	.079	-.043	こわい	.821	-.459	.036
つまらない	.760	-.437	-.245	異次元のよう	.806	-.062	-.025
汚い	.799	-.383	.129	苦しい	.790	-.410	.179
新しい	.759	-.003	.230	つらい	.869	-.404	-.020
改革的な	.891	-.100	-.056	重々しい	.845	-.165	-.010
情緒がない	.770	-.294	-.086	痛い	.821	-.459	.036
騒々しい	.860	-.326	-.060	悩ましい	.881	-.380	.079
猛々しい	.829	-.430	.071	あたたかい	.490	.700	.009
珍しい	.490	.664	-.116	おとぎ話のよう	.809	.072	-.159
独特な	.402	.706	-.280	あやしげ	.880	-.326	.043
奇妙な	.827	-.411	.104	難しい	.902	-.310	.030

Factor1の寄与率27%、Factor2の寄与率9%、Factor3の

(2) インタープリテーション後の小樽のイメージ

表4に示したように、第1因子の「きらびやか」「華やか」「あざやか」「かわいい」「悩ましい」「おとぎばなしのよう」は負荷値が低い。従って第1因子は「神秘性」とした。

第2因子については「親しみやすい」「話しやすい」「わかりやすい」「あたたかい」の負荷値が高い。従って第2因子は「身近な場所」と推測した。

第3因子は、「さびしい」の負荷値が高く、「情緒」と推測した。インタープリテーション前後の第1から第3までの因子を表5にまとめた。

表4. インタープリテーション後の小樽のイメージ

イメージを表す言葉	Factor1	Factor2	Factor3	イメージを表す言葉	Factor1	Factor2	Factor3
きらびやか	.790	-.024	-.130	話しやすい	.197	.552	.195
華やか	.841	-.084	-.131	わかりやすい	.167	.565	-.191
あざやか	.815	-.089	-.093	かわいい	.809	-.241	-.111
さびしい	.352	-.109	.758	悩ましい	.772	-.257	-.022
整っている	.751	.156	.014	あたたかい	.181	.626	.402
親しみやすい	.420	.591	.106	おとぎ話のよう	.838	-.113	-.171

Factor1の寄与率19%、Factor2の寄与率7%、Factor3の寄与率5%

表5. インタープリテーションによる旅行の価値の変化

	因子1	因子2	因子3
BEFORE	不確定な革新性	観光地の特性	—
AFTER	神秘性	身近さ	情緒

6. 結果

本報告では、インタープリテーションを行う前と、行った後で、イメージが変化することが確認できた(表3、表4)。また小樽のイメージの影響因子(表5)は、観光地を体験することがないと、「不確定な革新性」、および「地域特性」といった比較的ネガティブな因子が強く動いており、必ずしも観光地としての魅力度は高くない点が推測される。そして体験後は、影響因子は「神秘性」因子が、第1因子としてあげられる(表5)。第2因子は「身近さ」になった。第3因子は「情緒」因子(表5)であったが、寄与率が低いので、小樽を観光体験した後のイメージも影響しているものと推測される。否定的だったイメージから肯定的でより親しみやすいイメージの変化が生まれた。こうした変化は、体験とインタープリテーションによるものと推測され、これら2点の要素は観光地自体の魅力度を変えるものといえよう。また体験では観光対象の選定が大きく影響していると考えられよう。

7. 考察

インタープリテーションはある方向性のもとに行うことで、ツーリストイメージの変化に多くの役割を担っていると推測される。従って以下の点が重要と考えられよう。

1. ツアーの観光対象は、その観光地自体の魅力度を増幅させたり、減少させたりする点があ

る。

2. インタープリテーションにおいても、同様の傾向があると推測される。

以上の点を踏まえると、観光地は体験するインタープリテーションの内容によって、評価が異なってくる可能性が高い。従って観光振興にとって、観光客から観光客に伝わる情報、クチコミの重要性も指摘されよう。

ディーン・マキアーネル, THE TOURIST, 安村克己訳, 学文社, 2012年, p164,

1 キャサリン・レーニエ, インタープリテーション入門—自然解説技術ハンドブック, 食野雅子訳, 小学館, 1992年, p201

2 キャサリン・レーニエ, インタープリテーション入門—自然解説技術ハンドブック, 食野雅子訳, 小学館, 1992, p201

3 ダニエル・ブーアスティン, 幻想の時代, 星野郁美訳, 東京創元社, 1998年, p158

4 イーファー・トウアン, 空間の経験, 山本浩訳, ちくま学芸文庫, 1993年, p264,

5 テリー・イーグルトン著, 文学とは何か—現代批評理論への招待(上), 大橋洋一訳, 岩波書店, 2014年, p196

6 テリー・イーグルトン著, 文学とは何か—現代批評理論への招待(上), 大橋洋一訳, 岩波書店, 2014年, p190

7 齋藤敏子, 観光ボランティアガイド活動の方向性に関する研究, 富山国際大学現代社会学部紀要第3巻, 小学館, 2011年

8 松島 肇, 北海道石狩海岸を事例とした公共海岸の管理におけるインタープリテーションの有効性に関する研究, 日本造園学会全国研究発表論文集(25), 2007年

9 キャサリン・レーニエ他, インタープリテーション入門—自然解説技術ハンドブック 1992年, p20,

10 広報おたる「おたる坂まち散歩」第1話, 2001年5月

(2015年4月24日受理)